

North East Think Tank

1994.12

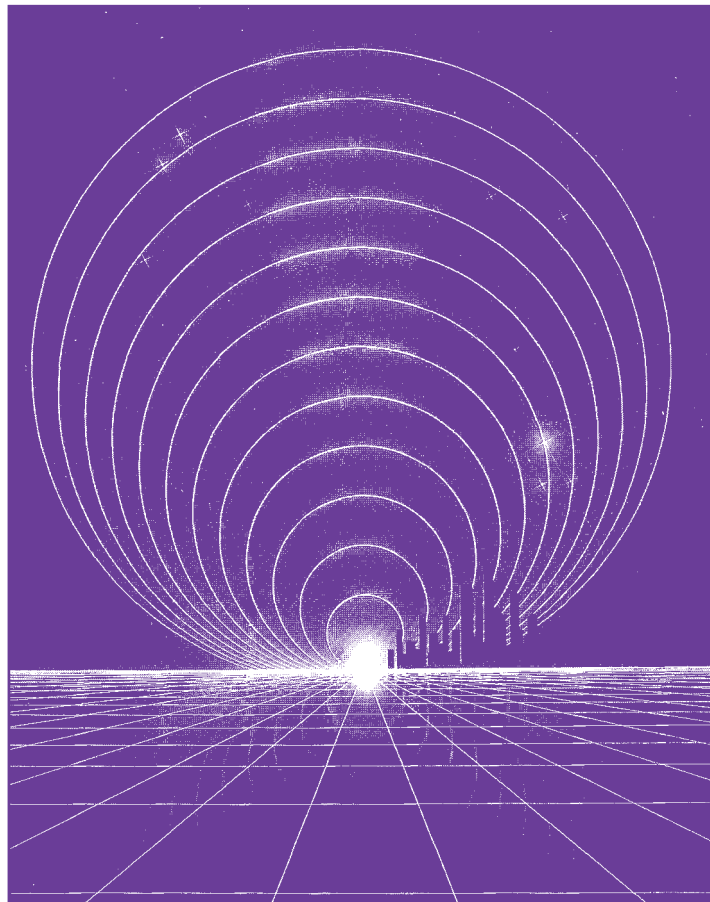
NETT

No.

9

◇特集◇

地域シンポジウム〈釧路・青森〉



ほくとう総研

1 ……羅針盤

若者の流出と定住対策

東洋大学教授 坂田 期雄

【特集】地域シンポジウム

2 ……地域シンポジウム（釧路）

基調講演「釧路の活性化策を考える」（抄録）

大阪産業大学教授 今野 修平

6 ……地域シンポジウム（青森）

基調講演「“新”地方の時代の国土政策と青森」（抄録）

国土庁計画・調整局長 糠谷 真平

【連載】

10 ……ほくとう総研調査研究レポート

北海道食品産業の高度化調査（研究員 山崎 健太郎）

13 ……新連載「価格破壊の現場」①

日本経済研究センター公共政策研究部長 武藤 博道

16 ……ほくとう日本のひとびと（6）「新渡戸 稻造」

ほくとう総研理事長 窪田 弘

【コラム】

19 ……リレーエッセイ「北海道大好き人間」

株式会社太平洋観光札幌 代表取締役社長 高崎 愛子

【ほくとう総研】

20 ……ほくとうDIARY・事務局から

編集後記



若者の流出と定住対策

東洋大学教授 坂田 期雄

このところ、地方農山村から若者の流出が続いている。地方自治経営学会が東北6県の町村について先程行った調査によると、昭和50年から平成2年までの15年間に、15～29才の若者層がおおむね3割から4割、多いところでは5割以上も激減し、代って65才以上層が6～7割方増加してきている。一方で急激な「若者の流出」と地方で急速な「高齢化の進行」とが、反比例的に大きなカーブを描いて進んでいる。

いま地方農山村は、全体の人口が減る過疎化が問題なのではなく、その中で若者層だけが急減を続け、このまゝ進めば人口の年齢構成が逆ピラミッド型となり、農業や森林の保全を行う後継者の確保も大変難しくなるという不安である。耕作放棄で遊休農地となっているところが、この調査でも畑ではすでに全体の2割から3割にのぼっているところもある。森林作業員の平均年齢も殆んどどの町村で50才代から60才代となっており、あと10年か15年後には、農地も森林もこれを保全する人がいなくなり、地域は荒廃の一途を辿って行くのではないかと憂慮されている。

このような状況の中で、いま全国の多くの町村では、若者の定住対策をどう進めるかが最大の課題となってきている。先般、山形でこのテーマでパネルディスカッションが行われ、ほくとう総研の高田喜義専務理事とともに私もそのパネリストの一員に加えて戴いたが、こゝでかなり興味深い討論が行われたので、ここにその一端をご紹介します。

まず第1は、若者が出て行くのをとめるのはなかなかむずかしい。むしろ一旦出た人のUターン、あるいはIターンといった“流入”対策に力を入れることが必要ではないか。たゞ地方には大学で教育を受けた人に見合うだけの就職先がなかなかないことが大きな問題だが、首都圏で就職している人の意識調査をみると、20代から30代にかけては約4割に近い人が自分の生まれたところに帰りた、Uターンしたいという気持ちを持っているという。

ところで、これまでこのUターン対策、定住対策としては、多くの町村でわが町に定住してくる者に、無償又は低額で土地や住宅を供給するとか、定住奨励金や結婚祝金を支給するなど、モノやカネで懸命に誘引を行っているが、必ずしもうまく行っているとはいえないようである。来るには来たが揚句の果ては、考えていたものとずい分違ふと、また帰って行ってしまうケースもある。だからこれからは、たゞ単に「どうぞ来て下さい」という姿勢ではなく、わが町にはこういうすばらしい素材、こういう材料が一杯ある。その空間を使って「わが町ではこれからこういう創造的なものをして行こうと考えているが、一緒にやりませんか」と、できる限りその地域の狙いとするものを前面に出して、言うなれば都会の人と対等に、共存という形で言い張って行く位の気持ち、姿勢が大切である。

第2は「定住か交流か」。このところ、交流ということが21世紀に向けての大きなテーマとして、各方面で大きくとり上げられてきている。たゞその際、定住人口の増加が難しいのでせめて交流人口の増加に力を入れて行くという発想ではやゝ問題であろう。交流は定住に代るものとはなり得ない。「定住なくして交流なし」といえるが、しかし、今後交流を積極的に進めることによってその中から何とか定住へとつなげて行く、そういう視点は極めて大切であろう。

第3は、「嫁不足、女性問題」。山形県遊佐町の例だが、一旦首都圏に出た人の回帰率をみると、男性に比べて女性は極めて低い。女性から地域が嫌われている、住み難いところだと思われる。農村地域は大都市に比べると、まだ古い家の制度意識が残っていて、姑、嫁というような言い方が未だにされている。そういう女性に対する古い価値観や言葉遣いが、若い女性に嫌われている。さらに農村では、大家族主義の農業経営ということで成り立っている部分があり、止むを得ないこととは思うが、せめて住む家は若い夫婦は別にする、世帯は別にすることが必要であろう。しゃれた新婚若者住宅を作って、若者の定住に大変役立った、成功したというところもある（京都府弥栄町、愛媛県河辺村など）。

釧路の活性化策を考える

大阪産業大学教授 今野 修平

① いま釧路は存亡の危機に直面している

歴史的にみると釧路は、資本主義経済、近代社会の発展の中で、前期の石炭文明時代にその恵まれた資源のもとで、20万都市が出来上がりました。昭和40年前後に第2段階の経済発展時期に突入、石油をベースにした、さらには天然資源から脱却した、新しい技術と情報で生きて行く時代を迎えました。先進諸国では、石炭あるいは天然資源をただ採ってくるだけに依存している都市は例外なく衰退してきています。

現在の釧路は、この大きな歴史の流れの中で、アゲインストの風の中に立たされています。

長い人間の営みの中での都市の命運というものを分析してみると、その都市の寄って立つ基盤がなくなるとどんな大きな都市も衰退化し、最後は、一人も人間がいなくなるというケースも珍しくない。これとは逆に、歴史の流れの中で新しい流れにうまく乗ると、それまでの寒村も大きなすばらしい都市に成長していきます。

ヨーロッパ型の近代社会では、職業あるいは生産行為が分業化という中で進んだため、都市的居住者が多くなり、別名、都市化の時代、と呼ばれています。しかし日本の社会は、こうしたヨーロッパ型の経済発展パターンとは異なり、農業を基軸にした自給自足の生活を2000年間日本列島の中で続け、村社会を造り上げてきました。

従って、すべての判断基準が、この自給自足と村社会から発想しています。その究極的な結論は、早くから都市社会が発展し、交流経済を確立、分業化・専門化した社会の中で生活してきた世界の他の地域に対して、日本が極めて異質な歴史を歩んできたという文化的なギャップが指摘できます。この日本の都市は、周辺の農山村を支配する場所、支配する機能として位置付けられていました。従

って、釧路とって議論するときには、精々広くても道東の中心都市ということで進むわけです。

ところが、世界の経済が石炭を前提として、天然資源から工業製品を作っていくという初期的な資本主義社会から、市場が重要になり、より高い生活を支えるために技術こそが産業を支え、そのエネルギーが石油に代わるという新しい第2段階の資本主義経済社会になってくると、資源が豊かな地域イコール豊かな生活と豊かな経済を展開するという法則性が、次々と世界中で破れてきました。

従って、資源に依存した発想、資源に依存した地域経済は、第2段階の資本主義経済社会の中では、いまや生きていく道を塞がれたといっても過言でない状況に到達したわけです。

石炭と魚に依存した都市、釧路だけでなく世界中の先進国の全てが、22世紀まで生き延びられるかどうかという問題に直面しだしたわけです。新しい時代の新しい歴史の流れの中に、いかにこの町を乗せていくか、という何世紀に1回の大事業が、いま釧路を待ち構えているという事態にさしかかっている。そして、その体制がいまだ明瞭に見えていない状況にあります。

② 新たな基盤産業をいかに育てるか

戦後50年間の日本の発展と生活水準の向上をみますと、分業化、専門化という体制の中で、石油、高度技術、情報、市場に支えられる社会の中で生きていく道を見つけた都市だけが、22世紀を約束されるという事態が明瞭になってきました。

したがって、都市が生き延びていくためには、「ベシク・インダストリー（基盤産業）」を持たなければならないということになってきました。

釧路がいま曲がり角に到達しているというのは、水産・石炭・紙パルプ、そしてこれを媒介とする

港湾という資本主義の前段階である基盤産業を持った都市だからです。

釧路の歴史を振り返ると、明治の後半から戦後までの50～60年の間に、20万人の都市が形成されるという日本でも発展の最先端をいく都市の1つとして出来てきました。しかし、石炭文明時代から石油文明時代にかわり、資源型の工業から技術型の工業に変わってきた昭和40年代以降、この点が怪しくなってきた。今後、釧路が22世紀にも23世紀にも生き延びていくためには、新しい時代に即応したベーシック・インダストリーを確立していかなければいけない、というのが釧路に課せられた最終的かつ最大の課題であります。

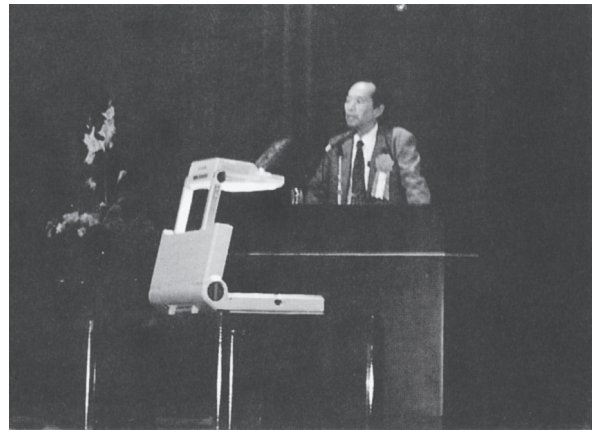
産業の新しい展開ということを考えると、行政がやり得るものは全体の数パーセントにしすぎず、かつ利益を追求する領域には手を出してはいけないことになっています。またその集団の中からは産業政策は生まれてこない。いまや釧路の再生を図る主役は地元の方々であり、釧路の資本、釧路の経営力であります。釧路の技術が新しい基盤産業を切り開き育てていかない限り、釧路の未来はなくなります。そして自らの力が無いときはよその力を借りる、支援を仰ぐということを積極的にやり、それを自らのものにしていかないと釧路の生きる道はなくなります。

③ 基盤産業とは何か

さて基盤産業とはいったい何かということですが、経済学では産業を大きく分けて、基盤になる産業と、これに付随する産業(寄生虫産業)、すなわち基盤産業にぶら下って食える産業の2つに分類することができます。

基盤産業はもう一つの側面として、他の地域から金が稼げる産業という定義もできる。また、どんな経済変動の中にあっても、ある領域はきちんと安定したシェアを持っている産業ともいえる。つまり、経済や生活を支えるのに不可欠の領域を占め、しかも外からお金をその地域に流入させている産業かどうか、この産業を新しい時代に合った中で創り上げなければならないというわけです。

今日、どのようなものが基盤産業なのか、とい



うことが国民経済の中で問われています。

かつての近代社会、工業の時代では第1段階が資源型の工業の時代、そして第2段階は技術の時代です。他の国、他の地域・社会にない高度な技術がある時には、その技術を駆使した工業がその地域の中心になる。しかしこの高度な技術を創り上げてきた工業そのものまでが、21世紀の日本を支える柱にはならないであろう、ということが定説化してきています。

つまり、生産行為で経済を支えているこの基本的な領域が今、180度変わろうとしています。21世紀の日本列島をどのようにデザインするかという議論は、これらのことを前提にして描かねばならない立場に至っているわけであります。

これは、日本列島だけでなく、釧路の場合も道東という地域経済の場合もまったく同じ立場にあります。

さきに基盤産業は、外から金を持ってこなくてはいけないというので「外」という言葉を使いましたが、その「外」の概念が今日大きく変わっている。どのように変わったかということ、国内、国外という国単位の境が崩壊した。したがって、「外」とは、世界全域と考えていただきたい。いま、基盤産業のことを考えると、釧路が外から金を稼がなくてはならないという、その「外」とは、世界全域から、ルーブルが、ドルが、ポンドが、マルクが、そしてフランス・フランがどれだけ釧路に流れこんできているか、流れ込むだけの惹きつける産業として釧路に何があるか、これが問われているわけであります。

4 これからの基盤産業と都市の変遷

東京一極集中という言葉が数年前から耳に入るようになったが、何かといえば、一つには東京だけが全世界から金を集める能力があって、大阪にはその能力がなくなっているということ。構造的には釧路も同じであります。

では東京が何で世界の金を集めたかという、それは金融と情報と国際機能です。東京は、工業も、大学数も、大学生のシェアも年々低下しています。にもかかわらず金が集まってきている。それは、東京が新しい時代の基盤産業として、金融と情報と国際機能を持つようになったからです。大阪はそのへんがまだ不鮮明で、むしろ関西では京都が自分の文化をベースに国際会議都市として実績を上げ、また神戸がファッション都市に切り替わってきている。具体的には神戸は日本一のファッション産業界の会社であるワールドを生み、京都では同じくワコールを生んだ。これらの産業が、デザインや企画力で世界から金を集めているわけです。それが神戸の基盤産業になり、京都の基盤産業化してきています。

今日の日本経済をめぐる状況は、こうした事態になり、世界からどれだけの金を集められるか、これがその地域の経済の基本になってきている。

しかし金を払うお客は魅力がなければ金は払わない。ラムサール条約で世界中の人たちがなぜ釧路に集まったのか、それは釧路湿原の魅力があったからでありましょう。21世紀の基盤産業に対する一つの示唆は、この釧路でラムサール条約の会議が開催できた、ということではないかと思えます。

5 生産から交流へ

以上のことを考え併せると、今後の経済の中心は、生産から交流へと変わる。交流とは何かというと、姉妹都市提携、観光客の移動といった物理的なものではなく、もっとも重要なのは情報の交流です。これから日本が生きていく道は、情報化時代、知識社会といわれているように、物ではなく、生産でもなく、頭脳で勝負することですから、

頭脳の刺激を受けるような交流こそが真の交流です。地域に対する交流は、来てくれる人の数ではなく、来てくれる人の情報量に価値がある。情報が有ればお客の狙いもわかる、世界の動きもわかる、歴史の流れもわかってくるわけで、その中で生きていく道が見つかってくるわけです。

こうした意味では、この交流という新しい時代を切り開くキーワードは、いわば買手市場化してきている。したがって、お客さまの意向に合ったものをいかにしてこちらがつくるか、いかにお客さまの意向にそったサービスを提供できるか、これが地域の命運を決める大本になってきたわけです。交流となると、広い範囲の中からつかまえていかなければならないので、釧路は道東の中心であるということは忘れ、世界の釧路である、世界の中に何を提供できるか、これを考えていくのが重要ではないかと思えます。

地方都市が生きる道は、そうした意味で小さな世界都市を創っていくことを各人が努力していくことです。そのためには、日本的な官主導型町づくりから脱却しないかぎりこの道は開けません。

6 いま世の中で変わっていること

まず人口です。人口動態調査で見ると、国の基本政策である四全総を策定したときの想定値と、現実とは様相が異なってきており、間もなく日本列島全体が人口減少になります。釧路が人口減少してもそんなに気を病む必要はない。人口がいくら多くても、情報力を持っていない人や生活水準の貧しい人がいくら住んでいてもいい都市とはいえない。こうした中で、一番心配されるのは1人当たりの県民所得です。北海道の県民所得水準が急速に落ちている。釧路が地盤沈下している背景には、北海道経済の急速な落ち込みがあり、この意味で、次の全国総合開発計画が議論になるときに、一番頭の痛い地域として北海道と四国があるのではないかと思う。この急速な所得の落ちと相対的な落ちは、歴史の波の中に十分乗り切れていないからだ、という疑念が湧いてきます。

次は東京一極集中ですが、東京圏は、1都3県で人口の25パーセントしかないが、銀行の貸付高



は52.4パーセントに達する。例えば北海道の銀行は、道内で金を集めて東京で金を貸しているという構造にあるわけです。そういう中で、東京の工業のシェアはどんどん落ちている。大学も落ちている。ということは、いまや工業や大学を誘致しても地域活性化の幹にならないということを現しています。それに対して東京が全国を圧倒しているのは金融機能と情報領域です。そうした意味で金融情報の東京一極集中は、東京だけが日本列島の中で新しい時代の歴史ののっているといえます。

こうした状況は人口が顕著に表しています。

人口が増加している都市は盛岡から東海道山陽新幹線を通して福岡まで線上につながっている。それ以外では地方の拠点都市とその周辺だけ増加している。これは中核都市の1時間圏内であって、1時間以上になるとマイナスとなる。いまや地域の命運は都市が握っている、というわけですから、都市の経済界が周辺地域の命運まで背負っていると、認識いただきたい。

また、都市を人口増加の動態で見ると、自律的に発展能力のあるのは、地方圏では30万以上の都市に限られてきている。したがって、30万以下の都市は、独自の戦略を組んでこの不利な条件を克服し、独自の歩む道を見つけだし、自らが個性を作り出していく路線を選ばない限りこの道は開けてきません。

また、景気の変動によっても雇用に影響が生じてきます。したがって国民経済の動向とどのように波長を合わせて自分の戦略をつくっていくか、ということも課題になります。

次に財政です。国の財政はすでにパンクしてい

ますが、世界経済の動向の中で、地方財政は比較的打撃が少なく、相対的に地方の単独事業がふえています。しかし、基盤中の基盤である社会資本整備については、地方ができるのは公衆便所、児童公園等の社会資本論でいうCの領域のみです。Cの領域がいくら整備されても産業は活性化されません。資本主義経済社会の中での基本原則として、社会資本Aという全国的な社会資本が整備されたときに産業は活性化する。

その方策が中央政府の財政難で破綻しているので、社会資本だけに依存して産業を活性化させようという方策が、もはや通用しない時代になってきた、ということをお話しています。

次に交流を見ると、地域間交流が圧倒的に大きくなり、東京を中心に各都市が全部つながっている。関東地方など地域間相互の交流まで非常に盛んになっていっている。一方北海道は、こうしたネットワークの発展自体が第2段階までもいっていない。釧路の経済界は、積極的に東京、大阪あるいは世界に自らを売り込んでいく、この戦略をいかに今後組立てるかが課題といえましょう。つまり、多角的なマーケットは、地元だけでなく、仙台、東京、広島、福岡にもあるわけで、そこに積極的に売り込まなければならないと、こう思うわけです。

その背景として、北海道の場合、情報の流れが悪いということ。複数の地域との情報ネットワークがきちりしているのは札幌だけという状況です。素直にいうと、北海道の立ち遅れは、今や、情報格差というものまで裏に巻き込んだ形で問題が深刻化していると思われまます。これを克服していくには、市役所の長期計画や北海道開発庁の社会資本整備計画だけではだめで、自らが動き出す時期がきているわけです。

経済界の奮起を、そして市民の新しい認識の確立を祈念いたしまして、わたしの問題提起とさせていただきます。

【特集】 地域シンポジウム・青森

「基調講演」抄録（平成6年10月31日開催）

“新”地方の時代の国土政策と青森

国土庁計画・調整局長 糠谷 真平

① これからの新しい流れ、 国土政策の考え方

新しい国土計画の策定作業を始めようということ、来る11月10日、国土審議会を開催し、その審議会でご了解が得られれば次の全国総合開発計画（以下全総）の策定作業に入ろうと考えています。

最初にお断わりしますが、よく「四全総のあとは五全総を作る」と云われていますが、私どもは五全総という言葉は使わないでおこうと思っています。第一次から第四次の全総というのは20世紀の計画であり、これからやるのは初めて21世紀に至る計画ですから、21世紀の最初の、第一次ということになります。今までの第一次から第四次までの単なる継続ではない、21世紀の新しい計画を作ろうとしているわけです。

これから作る新しい全総は、新しい時代、21世紀の始まりを画する計画にしたいと思っています。どういう意味で新しいか、2つあると思います。

一つは、日本の国土構造がこれまでと違った動きを示しはじめているのではないかということ。

今までの日本の国土構造は、東京一極集中、あるいは大都市集中ということで、第一次から第四次までの全総で色々努力してきたわけですが、「国土構造は変わらない、東京一極集中は相変わらず進んでいる」等という人々がおられる。

ところが最近の動きを見るとちょっと違ってきている。国土庁の「四全総総点検」の資料の中でも、東京一極集中は新しい局面を迎えたといい、一極集中が緩和、とか、改善に向かったということではないが、集中のメカニズム、集中の状況というものは鈍化してきている、といえると思う。

代表的な指標として「人口の集中状況」があります。高度成長期には、東京1都3県（東京・千葉・埼玉・神奈川）に毎年30万人から40万人の人口が流れ込む転入超過で、入って来る人から出ていく人を差し引いた転入超過数は30万から40万でした。50年代には少し収まりましたが、四全総を作成した昭和62年には16万人と最近のピークを示しました。その後はずうっと減少し、去年は転入と転出がほぼバランスし、転入超過人口はほぼゼロになりました。また今年の1都3県の人口は、転入超過から1万人オーダーの転出超過になると思います。

青森県は相変わらず転出超過になっていますが、去年の転出超過数は千数百人、四全総を作成した当時は1万人のオーダーで転出していましたから、かなり減って来ている。

そういう意味で、人口の動きが変わってきている。それも景気云々ではなく、かなり長期的な動きになってきているという気がします。

このように国土構造にも新しい動きが出てきている。こうした動きをしっかりと受け止める時期にきていると思う。

二つ目の新しい時代の始まりというのは、これから国土政策を考えていくにあたっての条件が、四全総までの条件とは変わってきているのではないかということです。

まず、一番目の時代認識としては、“地球時代”であるということ。国土政策を考えるにあたり、日本の国土、日本地図だけを見るのではなく、世界地図・地球儀を、少なくともアジア・太平洋の地図は考えなければいけない。青森空港からソウル、ハバロフスクへ飛行機が飛ぶようになり、八戸港も外国コンテナの定期航路が寄るようになっ

たということです。空港とか港湾の配置もアジア・太平洋地域との関係を考えていかなければいけない。産業立地自体が、国内だけでなく、アジア・中国等との競争になってきている。ということで、国内の国土計画から地球時代、アジア・太平洋時代の国土計画になっていかなければいけないということがある。

二番目の時代認識としては、“人口減少時代”であるということ。

人口はあと10年か15年もすればピークとなる。今1億2500万人くらいの日本の総人口が、厚生省の推計では2011年ぐらいでピークを打つというのが平均的な予測です。しかし、今の動きはそれより早い2005年から2010年の間に、1億2700万人とか1億2800万人ぐらいでピークを打って人口減少時代になるのは明らかな感じがします。

そうすると全国計画も地域計画も、「人口は増えるもの」と考えて計画を立てることは難しくなってくる。青森県の計画がどうということではないが、地域を小さくしていけばいくほど、人口減少というのはシビアに表れてくる。

そういう意味で、定住人口を増やしていくのも大事ですが、他の地域との交流で地域の活性化を図っていくのが重要になってくると思います。

三番目の時代認識としては、“自然再認識の時代”であるということ。

地球環境問題、渇水問題、ウルグアイ・ラウンド等もありますが、農山村或いは中小市町村を見直そうという動きが出てきている。何も大都市ばかりがいいのではない、地方の中小都市、農山村をしっかりと位置付けていくということが、実態を伴って行なわれるような時代になってくるのではないか。

そういう意味で、国土構造の面からも、また国土政策を考えていく色々な状況・条件の面からも、第一次から第四次までの単なる継続ではない、新



しい考え方、理念の計画にしなければいけないと思っています。

それでは、いま申し上げたことがこれからの国土計画でどんな意味合いを持ってくるかということです。

一つは、東京一極集中といていた時は、どちらかというところ東京と地方とが対立している、という見方でした、それぞれの地方、青森・秋田・熊本等にもそれぞれの特徴や顔があるはずなのに、地方ということで十把一絡げにしてしまう面があったと思います。けれどもこれからは、こうした二分類でない考え方が必要になってくる。

国土の均衡ある発展、というのは国土政策の基本であり憲法のようなものです。ただその意味合いは、従来は、高い所を押さえ低い所を押し上げて平均化する、格差を是正すること、とされてきた。もちろんまだその要素はあるが、より重点を置くべきところは、地域の多様性を尊重することで、均衡ある発展というものの意味合いも、多様性の尊重、多様な地域の中での連携・交流といったことがポイントになってくると思います。

国土軸・地域連携軸も、東京とつなぐというのではなく、地域と地域をつなぐ、地域と世界をつなぐ軸、として考えていくべきではないか。地域間の交流・連携が重なり合って国土軸になっていく、という考え方でいくべきではないかと思っています。

② 新しい国土政策における“ほくとう日本”および青森県の位置付け

北海道・東北は、四全総で“豊かな資源に恵まれた日本のフロンティア”と考えられています。四全総時代迄に大きな変化がみられたのは南東北までであったと思います。福島・宮城・山形までは四全総の時代でだいたい見えてきた。これからは北東北・北海道の時代になってくると思う。したがって次に作るべき新しい国土計画においては、北東北・北海道が本当の意味での“ほくとう日本”（南東北は拡大東京圏）かも知れません。

この場合、高速交通体系整備の進展の効果が大きいわけで、よく「高速道路は造っても東京に吸い取られるだけ」といわれてきましたが、それは高速道路が縦貫道路で東京につながりだけだった時代の議論だと思います。

最近、縦貫道路が完成し、横断道路の時代になってようやく高速道路がネットワークの効果をもち始めた。こうしたかたちで高速道路の体系も伸び、空港・港湾の国際化も進むことで、南東北まで伸びてきた発展の軸が、北東北にも伸びてくる条件ができてくるのだと思います。

新幹線は、四全総では整備新幹線について「国鉄改革の趣旨をも考慮して、逐次建設に着手する」という書き方をしていますが、この「国鉄改革の趣旨をも考慮して」と、なっているところがミソです。ミニ新幹線にするか、フル規格にするか、いろいろ議論があると思いますが、このミソのところの知恵がどういうふうに出てくるか、ということだと思います。

時間短縮効果も、東京～青森間をとると、比率ではさ程でもないが、青森～盛岡、或いは青森～仙台間をとると比率としての時間短縮効果は大きい。比率の問題ではない、絶対の時間だということかも知れませんが、それをどう使っていくかということも考えていただきたい。東京とつながりだけではない、地域間の交流連携という意味も大きいということをご理解いただきたい。

いろいろ議論があるにしても、道路・港湾・空港・或いは新幹線・鉄道の整備は進むわけで、その効果を最大限に生かして、それを北に延ばしていくということが必要であると思います。

もう一つ。前回青森に参りました時には青函トンネルや十三湊、今回は六ヶ所村（原燃施設）や三内丸山遺蹟を見せていただいた。このように青森ほど先端技術や縄文文化（歴史文化）に恵まれたところは他にない。従ってこれだけある先端技術、或いは歴史文化をどのように使っていくかということの色々をご議論いただきたい。参考までに一つ二つご提案させていただきます。

一つは、これからが“ほくとう日本”の時代だということ。青森に来ているからいうのではなく、本当に次の国土計画では“ほくとう日本”の位置付けが大変重要になってくる。北東地域の地方公共団体、経済界の皆さんが作成した“ほくとう銀河プラン”の北海道・東北を一体として考えていこうということ、これからは、市町村とか都道府県とか、あるいはブロックの境を越えて、少し大ぐくりの国土の区分で考えていこうという時代だと思えます。

そういう時代に“ほくとう銀河プラン”を出したことは重要なことですが、ポイントとなる北海道と東北を一体化して考える条件、結節点となる函館・青森、いわゆる青函地域の取り上げ方の印象が非常に薄い。

四全総で、“青函インターブロック交流圏”を提案し、そのあと2年をかけて調査したが、その後の進展ははかばかしくない。先日『青函インターブロック交流圏の点検検証中間報告』のポイントを見せてもらったが、“青函インターブロック交流圏”のその後の動きは、名刺交換の意味はあったという結論のようだった。ただ、名刺交換に留まっているようでは“ほくとう銀河プラン”とか、「北海道・東北を一体的に考えていこう」といっても言葉だけの話で、とてもそんなことが成り立つようにはならない。

なぜかと思うに、一つは最初に作った“青函イ

「インターブロック交流圏」の構想が、何でも連携交流しようと、非常に総花的、網羅的な計画で焦点が定まらなかった面があったということ。

国土庁では、地域連携軸の調査を、青函地域を含め全国10箇所ほどで焦点を絞ってやることにしている。青函地域で何をやるかは地域の皆さんの考えることですが、今は産業面では難しい。ですから歴史・文化・観光といったものを軸に考えて見るのが現実的である、というのが私の現時点でのイメージです。というのは、青森、函館にはそうした貴重な歴史・文化遺産があるわけで、それを生かした連携交流を軸に考えてみてはいかがかということ。これから人口減少時代を迎えると、定住人口プラス交流人口が重要になってくる。これからリゾート需要は、5～10年で倍増するといわれます。交流人口は、定住人口に換算すると消費支出の面で4～5人分の波及効果があるといわれ、その関係で歴史・文化・観光が重要になってくるということです。先端技術・歴史・文化がある青森の観光は、ネットワークを組んで数ヶ所回るようにしたらよいと思う。

そういう意味で、下北半島の交通アクセスの改善や、津軽の交通アクセスも重要です。

最後をお願いしたいのは、これから新しい全総計画の策定作業に入りますが、地域の皆様のご提案を伺って全国的に纏めていくものですので、是非色々なご提案をいただきたい。

北東北・北海道、南の西南日本の方もそうですが、まだまだ基幹的なインフラ整備をやっていかなければいけないことが沢山あり、それは次の国土計画の計画期間中にやり遂げる心積もりでやっていきたいと思う。しかし、そうした基幹的なインフラをどう使うのか、「何を作る、これを作る」ということも重要ですが、「それを使ってどうするのだ」という構想、ハードだけでなくソフトの面を重視したいといっているのはそういうことです。

また、国土軸とか地域連携軸というもの、ただ道路を造る、鉄道を引く、橋を架ける、トンネルを掘るということだけでなく、「それを使って何をするのだ」ということで生かしていきたいと思っていますので、是非前向きな明るいご提案をお願いいたします。



北海道食品産業の高度化調査

～ 環境保全産業への飛躍を秘める ～

1. 今日の北海道産業の構造と課題

北海道産業は、依然として製造業のウエイトが低く、公共事業等財政に依存する脆弱な体質にある。その中で、本道では先端技術・加工組立型産業の誘致・育成による製造業全体の底上げに努めてきており、その結果、先の平成景気で道外企業の誘致を中心に一定の成果を収めることに成功した。しかし今日のように、円高の進行とそれともなう国内産業の海外移転が進む状況下にあっては、道外企業誘致によるもの以外の現状に即した現実的な製造業の振興策について改めて検討してみる必要がある。その具体的な振興策の一つとして

- ①道外からの企業誘致という形をとらずとも地場企業の資本・技術などで内発的発展が可能である。
- ②原料立地であることや土地・労働力が豊富であることから他地域に対し比較優位がある。
- ③道内一次産品を原材料とするなど道内他産業との結び付きが強く本道経済への波及効果が大きい。
- ④生活必需品であるため景気変動に対して安定的である。
以上あげた理由により食料品製造業の振興を提案するものである。

2. 北海道食料品製造業の現状

本道における食料品製造業は事業所数・従業員数・出荷額ともに製造業全体のおよそ1/3に達しており、(図1参照)

本道製造業において主要な位置を占めている。しかし、付加価値率をみても道内製造業の中でも最低位であり、全国の食料品製造業の水準からも10ポイント近く低いものとなっている。(表1参照)

その理由としては以下の点が指摘できる。

- ①食料品製造業でも一般的に付加価値率の低い水産食料品の占める割合が全国に比して高い(表2参照)
 - ②構成比の大きい水産食料品・畜産食料品の付加価値率が全国水準に比べ低い。(表1参照)
- これは、**本道が水産品・畜産品の加工用原料・**

表1 小分類項目での付加価値率の全国比較

(単位：%)

項目	付 加 価 値 率		
	北 海 道	全 国	本道—全国
食料品製造業	28.6	38.3	▲ 9.7
畜産食料品	21.6	26.2	▲ 4.6
水産食料品	23.5	29.2	▲ 5.7
野菜缶詰	39.0	38.6	0.4
調味料	43.2	49.0	▲ 5.8
糖 類	16.6	27.6	▲ 11.0
製穀・製粉	15.0	17.5	▲ 2.5
パン・菓子	54.4	51.3	3.1
動植物油脂	26.1	30.2	▲ 4.1
その他食料品	39.2	41.7	▲ 2.5

資料 通商産業省「工業統計表」

低次加工品の供給基地に甘んじている結果であり、食料品製造業を高度化する上で低次加工品を如何に高次加工化していくかが課題となっている。

3. 本道食料品製造業の優位性と課題

本道食料品製造業を高度化していく上での優位性と課題を整理してみると

①優位性

- a) 自然環境が良好で食料品を製造するのに不可欠な良質な水が比較的容易に得られることに加え、衛生管理や低温熟成に適した冷涼な気候にも恵まれている。
- b) 道内産の良質で豊富な一次産品を原材料として利用できるとともに、良質な食のイメージを持つ「北海道産」ということで消費者に対しアピールできる。
- c) 労働集約的な側面の強い食料品製造業に適した豊富な労働力を有しており、更に、その労働力は原材料の生産者が多くことから、経験的に原材料品の扱いに習熟している者が多い。
- d) 北方圏諸国との窓口として、海外原料・市場等を求める場合に有利な地理的位置を有している。

②課題

- a) 東京を中心とする大消費地から離れているため輸送コスト負担が大きいことに加え、輸送日数もかかり、製造年月日の面で鮮度指向の強い消費者に対し商品競争力が弱ま

る。

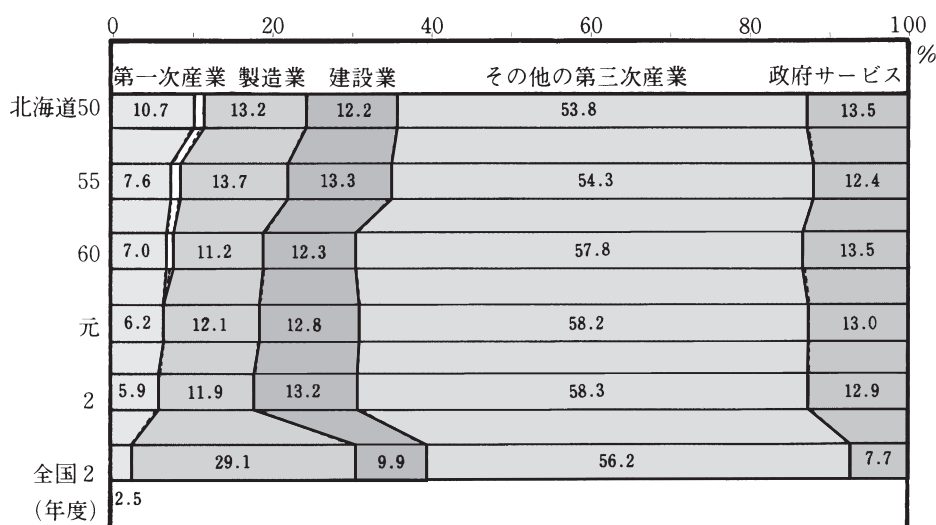
- b) 「最初に材料ありき」で、そこから何を造るかといった製造業者の立場での商品開発が多く、消費者ニーズを把握しそれを商品化するという消費者の立場での発想が希薄である以上の点が挙げられ、これら優位性の活用と課題の克服が必要となっている。

4. 優位性の活用と課題の解決のための対応策

かかる状況を踏まえ、食料品製造業の振興をはかるため以下のような取組みが必要と思われる。

- ①豊かな自然環境や冷涼な気候、品質の高い道内一次産品、そして本道の持つ食のイメージをも活用し「北海道」らしさを訴求できる商品開発を行うことで他地域商品との差別化をはかっていく。
- ②ロシア等の海外原料や未利用資源を活用することにより、低価格原料の調達をはかるとともに、年間を通じた原料の安定確保による通年操業率の向上をはかりコストダウンに努める。
- ③製造年月日がさほど問題にならず、付加価値も大きい冷凍・チルド食品、チーズ・ハム類など

図－1 産業別道内総生産の構成比の推移（年度）



出所 経済企画庁「国民経済計算年報」、北海道「道民経済計算年報」

注1 帰属利子等を含んでいるので、合計は100%とならない。

2 全国は暦年ベース

長期保存の可能な食料品への商品展開をはかるとともに、長期保存を可能にする技術の開発に努める。

- ④商品企画段階から価格設定、流通経路まで小売業者とのタイアップをはかり、消費者ニーズに対応した商品開発を行うとともに販売先の確保を行う。
- ⑤本道が有する食品加工関連の研究機関を産学官の協調により有効に活用する。その際には、市場動向を重視した明確な開発戦略を定め、そこに研究資源の投入を集中的に行い、更に基礎分野は研究機関、商品化は企業、といった連携・役割分担が有効であろう。
- ⑥将来的には、テクノスーパーライナーの導入や高速道路の整備等により輸送時間の短縮に努める。

以上、差別化・コストダウン・高次加工化、の3点が食料品製造業の高度化へのキーワードといえよう。

5. おわりに

本道において食料品製造業を振興していくためには、以上の視点を踏まえ①消費者ニーズを的確に捉えた上での商品の差別化②海外原料や未利用資源の活用によるコストダウン③冷凍・チルド食品等の高次加工食品へのシフト、等をはかり、高度化を推進していく努力が不可欠である。

更に、従来は食べ物を作る産業であった食料品製造業も、今日のバイオテクノロジーの発達を受け、食料品から燃料・薬品といったものを効率良く生産する技術を確立しつつある等、幅広い分野への応用が可能となってきている。このように、自然の動植物を利用した食品関連技術の進展は環境保全に有効に機能し、総合的な環境保全産業へ飛躍する可能性を秘めた産業である。既存の食料品製造業の技術を向上させる一方で、このような未来産業の芽を育てていく姿勢も必要であろう。

(研究員・山崎健太郎)

表－2 小分類項目での製造品出荷額、付加価値額の全国比較

(単位：億円，%)

項目	製造品出荷額		付加価値額	
	北海道	構成比	全国	構成比
食料品製造業	20,493	100.0	240,914	100.0
畜産食料品	4,662	22.9	50,664	21.0
水産食料品	9,123	44.5	39,569	16.4
野菜缶詰	490	2.4	9,699	4.0
調味料	234	1.1	15,212	6.3
糖類	1,144	5.6	5,477	2.3
製穀・製粉	976	4.8	15,387	6.4
パン・菓子	1,598	7.8	43,704	18.1
動植物油脂	69	0.3	6,783	2.8
その他食料品	1,999	9.8	45,827	19.0

出所 通商産業省「工業統計表」

注1 秘匿業種があるため各項目の合計と食料品製造業全体の数字は一致しない。

2 「野菜缶詰」は果物缶詰、農産保存食料品を含む。

価格破壊の現場 ①

～オフィス街のオフプライス・ストア～

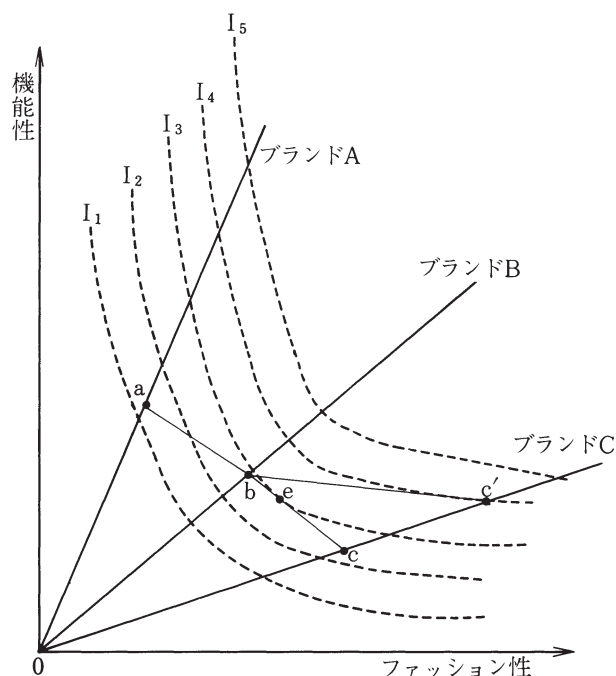
日本経済研究センター公共政策研究部長 武藤 博道

平成6年7月25日、大手町の産経ビル1階にデザイナーズ・コレチオーネが進出した。一昨年秋、六本木に第1号店を開店して以来8番目である。同店は人材派遣業で知られるパソナが米国のギドエンタープライズ社と提携し、海外有名ブランド品を安く売るオフプライス・ストアだが、従来の店舗展開が繁華街をターゲットにしていたのに対し、今回はビジネス街の中心に進出した点が注目されている。そして、営業時間も六本木店が月～金15:00～22:00、土12:00～19:00であるのに対し、大手町店は月～金11:30～14:00および17:00～19:00とさすがに時間単位のビジネスを売り物とするパソナならではの配慮である。それにしても、こうしたオフプライス・ストアがわずか2年で急拡大した要因はなんだろうか。

価格破壊の威力

理由は何よりもカテゴリー・キラー（価格破壊によってデパートやスーパーの特定の商品領域の存立を危うくさせる売り手）としての価格の割安感である。例えば、大手町店においては小売価格17万円のアルマーニのスーツが10万8千円、11万5千円のジバンシーのスーツが4万6千円、3万円のニナ・リッチのスカーフが1万7千8百円といった具合に有名ブランド品が3～7割引きの値段で買える。バブル最盛期にブランド品に親しんだ消費者にとってこの価格はきわめて魅力的であり、定価販売のデパートや専門店からオフプライス・ストアに客が流れたとしても不思議ではない。こうした動きをK. ランカスターのブランド選択モデルを援用すると、やや抽象的になるが、次のように説明できる。

図 ブランド選択と値下げの効果



いま、紳士服の特性が機能性とファッション性の2つに色分けされ、市場にはA, B, Cの3種類のブランドしかないでしょう。そしてAは最も機能性が高く、Cは最もファッション性にすぐれ、Bはその中間だとする。図において、各ブランドごとに原点から放射状の伸びている線は、それぞれのブランドが持つ特性の相違を示す。他方、買い手は2つの特性の両方を考慮にいれながらブランドを選ぶものとする。図のI¹, I², I³, ……は、機能性とファッション性の組み合わせに対し、買い手が同じ水準の効用を感じる無差別曲線である。また、買い手は紳士服に対しあらかじめ一定の予算しか割当てていないものとする。図の点a, b, cは各ブランドに紳士服予算を全額注ぎ込んだ場合の購入限度であり、a, b, cを結ぶ線上はブランドAとBまたはBとCを組み合わせた場合の

購入限度を示す。

こうした前提のもと、買い手が予算枠内で最も高い効用を得ようとする、点e（ブランドBとブランドCの組み合わせ）が選ばれることになる。仮にブランドCが高級輸入ブランド品で、ブランドBが国産有名ブランドだとすると、買い手は輸入ブランドだけを選ぶよりも、一部は国産有名ブランドを購入するであろう。

だが、ここで高級輸入ブランドを安く売るオフプライス・ストアのような店が登場すると、ブランドCの購入限度は点cからc'に移動するであろう。そうすると買い手の効用を最も高くする点もcからc'に動いてしまう。つまり、この場合は、紳士服用の予算を全額値引き後の高級輸入ブランドに向けることが最も効用を高めるわけである。デザイナーズ・コレクチオーネの急拡大は、割引価格を通じて、ブランド品を百貨店や専門店で購入していたお客を奪ったり、従来は手が届かなかった新規顧客を発掘することによって実現したものと考えられる。

伸び悩む既存店の衣料品販売

ところで、最近の価格破壊はオフプライス・ストアだけではなく、シーズン遅れの工場在庫や流通在庫を処分するアウトレット店（フォークランド、プライスマジックなど）、郊外型安売りチェーン（青山商事、アオキインターナショナルなど）

の展開によっても進められている。これらの影響は、近年の売り上げ不振に悩む小売業の中でも特に衣料品の販売に強く現れているように思われる。

表は1991年以降の百貨店、チェーンストア、および小売業全体の販売額の伸びを示すが、明らかに衣料品は価格破壊が顕著になった93年の落ち込みが大きい。もちろん、こうした落ち込みには数量の減少と価格の下落の両面があり、価格破壊の詳しい影響を見るにはそれぞれがどの程度寄与しているかを区別すべきであろう。しかし、現状ではデータの制約によって、販売の現場で価格が何パーセント下がったかを把握することが難しい。例えば、西友の調べでは93年度の取扱い品目の価格は平均7%低下しているが、消費者物価指数を見る限り商品全体で0.4%上昇している。もちろん直接的な比較はできないが、こうしたギャップがあることを念頭に衣料品の消費者物価を地域別に見ると、93年の対前年上昇率は全国=-0.8%、北海道=0.2%、東北=1.4%、関東=-0.7%、北陸=-0.7%、東海=-0.5%、近畿=-1.2%、中国=2.6%、四国=-2.0%、九州=0.5%である。また、京浜=-2.3%、中京=-0.2%、京阪神=-1.1%、東京都区部=-4.4%とオフプライス・ストアやアウトレットや郊外型安売りチェーンの進出が激しい地域ほど下落率が大きい。

消費者物価の調査対象にデザイナーズ・コレ

オーネや青山やアオキが含まれているとは考えにくく、またセールの価格は対象外である。しかし、百貨店やスーパーでは土、日に値下げをするケースが多く、その時の売り上げも大きい。しかも93年は例年以上にセール時の値下げ率も大きかった。価格破壊の影響は統計に現れる以上に大きかった

最近の衣料品売上高の伸び率 (%)

業態別		暦年		
		1991	1992	1993
百貨店売上高	総合	3.6	-3.3	-6.6
	衣料	4.9	-3.0	-6.5
チェーンストア売上高	総売上高	4.8	0.5	-2.4
	衣料品	3.0	-2.6	-6.3
小売業販売額	合計	5.8	-1.3	-3.8
	織物・衣料・身回り品	5.7	-3.1	-5.0

資料：日本百貨店協会、日本チェーンストア協会、通商産業省調べ。

ものと判断される。


第2次価格革命の行方

上記のような変化に対し、百貨店をはじめとする既存店も価格帯の見直しや仕入れルートの開拓など新たな経営努力を展開している。例えば、ポロセーターやポロシャツなどのPB（プライベートブランド）衣料などでは、素材に遡った開発と一括生産によって、同じ品質レベルで2～3割の価格引き下げを可能にしたといわれる。これらはバブル期の高級化、高額化路線から「値ごろ感」重視への転換であり、カテゴリー・キラーに対する反撃の狼煙といってよい。実は小売り業界において価格破壊が話題を呼んだのは1970年頃に続いて2度目である。当時はメーカー出荷価格と小売価格（定価）の幅のなかで薄利多売によって一般小売店より安く売る店が登場し、それが流通経路をかく乱した。城山三郎の小説「価格破壊」が描くのはまさにそうした舞台である。しかし、今回の価格破壊は仕入れルートが国際化し、小売業者

がメーカーを再組織するなど、前回とは質的に異なる様相を見せている。この意味で現在は第2次価格革命の渦中にあり、小売業界全体の構造変化につながるようになるだろう。

しかもこの変化は、価格革命の引き金を引いたカテゴリー・キラーさえも巻き込まずにはおかない。冒頭に紹介したデザイナーズ・コレチオーネ大手町店を開店2カ月後に訪れた時、六本木店よりも入店客が少なく、滞留時間も短いという印象をうけた。

これにはアフター・ファイブのレジヤをショッピングで楽しもうとする客の多い六本木と仕事の延長線にある大手町との立地の差もあろうが、一般に値引き率のインパクトが低下してきていることも否定できないように思われる。例えば、17万円が10万円台といっても、他の国産スーツに比べれば決して安い値段ではない。賃金上昇に多くを望めない状況の下で価格戦略そのものの見直しが必要な時期にきているような気がする。



12月1日（木）～12月25日（日）

X'mas スペシャルバザール開催中
当店通常価格より更に割引！

Men's		推定小売価格	X'mas価格	Ladies			
Valentino	ネイビーブレザー	¥142,000	→ ¥52,360	AUGUSTUS	スーツ	¥83,000	→ ¥22,920
TRUSSARDI	ボタンダウンシャツ	¥22,000	→ ¥7,686	ICEBERG	トレーナー	¥43,000	→ ¥14,340
V2 by VERSACE	ハイネックセーター	¥72,000	→ ¥26,530	B. KAISERMAN	スーツ	¥65,000	→ ¥23,280
VERSACE SPORT	ポロニット	¥60,000	→ ¥22,820				

※数量に限りがございますので、品切れの際はご容赦下さい。

1万円以上お買い上げのお客様には
ラッピング無料サービス！

ほくとう日本のひとびと(6)

ほくとう総研 理事長 窪田 弘

新渡戸 稲造

3年ほど前、十和田市の新渡戸稲造記念館を訪ねた時、私は初めて新渡戸稲造の出身が十和田の三本木であることを知った。

稲造の祖父新渡戸傳は、開拓者精神の旺盛な人であった。南部藩のお山奉行として、20キロにわたり草木もはえず人影もない荒蕪地三本木原の植林等を行っていた。ぜひ本格的な開拓を行いたいと考えて、安政2年南部藩の命を得て工事に着手。十和田湖から流れ出る奥入瀬川から人工河川を掘削し、難工事の末、安政6年に完成した。今日でも、満々たる水をたたえた稲生川が多くの住民に多大の恩恵を与えながら流れているのを見ることが出来るのである。父十次郎も傑物であり更に大規模な開拓を計画したが、領内に独立国を打ちたてようとしているのではないかとの疑惑を招き、謀反のかどで取り調べを受けた。十次郎は、失意と自尊心の痛みに耐えかねて自殺したといわれる。

明治天皇は、東北御巡幸の途次新渡戸家にお立寄りになり、傳の開拓事業を賞賛された。稲造はその時東京の英語学校へ遊学に出ており、家族一同の拝謁に加わることはできなかったが、大いに感激し、御下賜金の分配金で英語の聖書を買った。稲造は自分の家系に思いをいたし、こういう家に生まれた男の責任として、やはり自分は祖父の志を継いで、社会公共のために一生をささげる義務があるのだらうと思った。(杉森久英「新渡戸稲造」による)。そこで稲造は、英語学校を卒業するに当たり、多くの学友が東京大学に進んで法律政治を学び、官界に飛躍することを夢見たなかで、札幌農学校を選ぶ。さらには太平洋の橋になろうと志すのである。

新渡戸稲造は、狩野亨吉の後を襲って第一高等

学校(旧制)校長になった。古武士のような狩野の後に、クリスチャンで、アメリカで長く生活し、アメリカ婦人を妻としていたハイカラな新渡戸が着任したことを歓迎する一群がいた反面、反発する空気もあった。しかし、新渡戸の任命は文相牧野伸顕の発案で、時あたかも日露戦争の翌年で新しい時代にふさわしい新しい教育を実践することを目的としたものであった。

矢内原忠雄氏は、「余の尊敬する人物」(岩波新書)で、新渡戸稲造について以下のように書いている。

「内村鑑三と新渡戸稲造とは私の二人の恩師で、内村先生よりは神を、新渡戸先生よりは人を学びました。両先生は札幌農学校で同級の親友でありましたから、その意味では私も札幌の子であります。新渡戸博士は私の一高時代の校長でありました。先生の教育上の思想は人格観念に基づく平民主義であります。それが「社交主義」ともなり「国際心」ともなって現れたのであると思います。第一に先生は、生徒の自発的覚醒を促す態度をとられました。第二に、先生はつとめて平易卑近の用語や引例を用い民衆の近付き易いように話されました。通俗雑誌に平易な修養講和を連載しましたので、学者らしくないという非難の声もありましたが、『真の学問は、筆記できるものではなく、行と行との間にある』とよく言われていた。第三に、世間の批判誤解を恐れず、日本の国際的な立場などについて淡白に何でも話されました。先生が世の誤解や批判を恐れず自由に言論したのは、先生の心中、依り頼むところがあったからです。先生の愛吟の古歌に、

見る人の心ごころにまかせておきて
高嶺に澄める秋の夜の月
折々は濁るも水の習いぞと

思い流して月は澄むらん

というのがあります。自分の正しいと信ずることを率直に述べれば、世間の誤解や非難を受けるのはあたりまえである。それを一々気かけたり相手にしたりしては、何一つ正しいことも述べられず、善いこともできない。「すべての人が汝等を誉める時は、汝等禍である、」とキリストも言っている。世間の非難は世間に任せて、自分は正しき立場に立っていればよい。これが先生の信念でありました。

先生が最も好んだ季節は秋であり、秋にあって最も好んだのは月であり、月に対して感じたのは悲哀でありました。「かなしみ」は、人の靈魂が神を求める声であります。縦の関係において「かなしみ」の心を養うべきことを教えた先生は、横の関係においては「チアフル」(cheerful)ということを力説しました。チアフルな態度、顔つきで人に接し、見ず知らずの人にたいしても少しの親切でもしてあげるといふ心持ちで暮らせば、社会はどれだけ温かくなるかもしれない。それが日本にたいする外国人の誤解を除き、日本の国際的地位を高める道である、というのが先生の考えであります。

教育者としての新渡戸先生の精神を要約してみましよう。第一に、日本人の心を島国的の独り善がりから開放しなくては、国際社会における我が国の地位を向上し、尊敬を受けることはできない。第二に、心さえ「縦の関係」において依り頼むところがあれば、正しいと思うことを言い、また行ふべきである。博士の残した精神こそ日本国民の最も必要とするところでありましよう。」

この、矢内原先生（私が東大教養学部に入ったときの学部長であった）が師の心を思い、憂国の精神をこめて書かれた文章が、大東亜戦争直前の昭和十五年に出版されていることに大きな感慨を覚えるのである。

私は、十和田市の新渡戸稲造記念館で見かけた、新渡戸博士の著書「自警録」を早速求めて読んでみた。中でも、「知らぬ恩人に対する感謝」は、感動を呼ぶ。(以下引用)



新渡戸 稲 造

(出典：盛岡市先人記念館 編
「盛岡の先人たち」より)

「人から受けた親切ほど忘れやすいものはない。否、人のしたことが、はたして親切であるか、不親切であるかその区別すらもなかなかしない。このへんの弁えを誤ると、とかく他人の目には、恩知らずの感をあたえる。日本人は、恩を知らないと云われるが、知らないのではなく、先方の方がどれほどの親切でしたのかが分からぬために、有り難うというべきところを言わなかったりする。明らかに我の耳に達したこと、あるいは我が目に映った行為のほかに、人も知らず、我自身も知らないでいる恩がたくさんある。かくのごとき恵みが人生の中に数限りなくあることを常に記憶に存しておきたい。たまには誰が告げるといふのではなく、ふと心に有難味を覚えて、ほとんど相手を知らずに帽を脱し、跪いて、有り難さに、涙に咽ぶこともある。誰しも必ずこの経験があるだろう。もしこの経験のない人ならば、それは不幸な人である。

僕が第一高等学校に在職中、ことさらに僕の感じたことがある。試験の初日であった。僕が各教場を通過して廊下に出て、玄関の側を歩んでくると、ちらりと眼に映ったものは、分館の玄関のわきの人力車の傍らに立っている車挽きと、これを隔つること一間ばかり傍らに、袋を手をしている四十ちかくの婦人であった。静かで、ほとんど人なきがごとき様であるところの玄関に、何用あって婦

人のいることか、その理由もちょっと解し難かったから、僕はこの婦人に向かい、その用を質して、「もし学校の事務所に御用あらば、あの玄関でお尋ねなさい。ここは試験の最中で人がおってもいらないようなものです」

その婦人はさもその辺のことは承知のごとく、「ハイ、ここで待っております」というだけで、さらに動く様子も見えなかったから、「あなたのお尋ねになる方は、ここにいる人ですか」「ハイ、いま試験しております」「先生ですか、生徒ですか」「生徒でございます」「生徒ならばまだ急に出るわけには行きますまい。試験は十一時までですから、もう二時間もあります」「それも承知しております」

この婦人はさらに立ち去る様子もなく、少し恥ずかしそうにして、「ただこちらで待っております」というだけなので、僕は何か容易ならぬ子細もあらんと察して、ひとしお念入りにその用向きの次第を質したところが、

「今試験をしておりますが、昨日自宅で目眩がしましたから、今日もしやそんなことでもないかと思って、ここに待っております。まさかの時には連れて帰るつもりで、車を頼んで参りました。それに今朝飲む薬も、急いでいて忘れちゃったから」

「私がお薬を飲ましてあげましょう」

「もう遅くていけますまいし、またもしや私がここに参っていることでも知れると、試験のためによろごさいません」

「それじゃ、名はなんといいますか」

「……」

「ここの試験では、毎年三、四名ぐらい目眩するものができたり、その他いろいろの病人が起こるので、監督の先生たちはそういうことに始終気をつけていられるし、また係りのお医者もあって、そんなことがあると、おそらくあなたが世話をなさるよりも、かえって学校の世話のほうが行き届くだろうと思いますから、心配なさらずに、お帰りになっても大丈夫でしょう。しかし、念のために番号だけわかったら知らせてお置きなさい」

「……」

「イエ、御当人にわからないようにして、見はりをつけてあげますから、当人にはなにも知らないように、お医者様と監督の先生に、ことさら注意をするようにお頼みしておきますから、安心なさい」と言ったので、始めて何部の何番ということを知ったから、さっそくその教室に行ってみると、なるほどその顔形がいかにも件の婦人によく似た青年で、まさしく両者の関係が親子であることが判然とした。彼はそんなことは夢にも知らず、答案に余念ないさまであった。

十一時の鐘が鳴ると同時に彼も教室を出て、友人と笑いながら話をしているのを僕は認めた。これなら大丈夫だ、この様子で家に帰ったなら、母の安心はいかばかりであろうと思いつつ、彼の姿の門を出ずるを見送った。おそらく彼の脳髄はただ試験の答案をもってのみ満たされて、母の苦心に考えを向ける余地はなかったろう。しかるにいくんぞ知らん、彼が無難に何時間の試験を経、その翌日もまたその翌日も無難に経たことは、彼の学力のみによると思ったら、大に見当がちがっておりはしまいか。

彼の眠られぬ時はともに起き、彼の眠っている際もなお眼がまし、彼の起きぬ間にとく起きて彼の準備を助け、彼の眼や耳にさらに触ることなく、彼の身辺を擁護する母の情愛があつて、始めて無難に試験を経たものと、迷信か知らんが僕は信ずる。

右はただ僕の実見にふれた一例にすぎぬ。かくのごとき恩愛は人の眼を忍んで、世にあまたあると信ずる。いな、あまたどころではない。かくのごとき情愛は空中に満ちていると思う。ただ、この満ちている情愛に触れていながら、これに感ずるに鈍きわれわれの心情こそ、遺憾至極である。感応の力にして鋭敏であるなら、いたるところありがたいからざる場所はなく、見る人ごとによりありがたいからざる人はない。」

新渡戸稲造は、知の人であったが、また同時に情の人であった。知情意を兼ね備え、他人の立場をわかることが出来たからこそ、外国の人の理解と共感をえることが出来たのだろう。

北海道大好き人間

株式会社太平洋観光札幌
代表取締役社長 高崎愛子



木枯らしが吹き、時折り白い雪が舞う季節になると、胸の奥がきゅうーと痛くなることがある。それは、11月という月が人恋しくなる季節ということもあるが、幼い頃この季節に味わった不安と淋しさが、木枯らしとともに甦ってくるせいであろうと考えている。それは、こんなことが原因しているのである。

幼い頃のこの季節、祖母の故郷九州から毎年のように渋柿が木箱で送られてきた。それを焼酎で渋ぬきをしたものを一家で食べる時、必ず祖母達が故郷の自慢話しをするのである。『庭に柿の木が何本もあって、たわわに実った柿の実に秋の陽ざしが当たり、それはそれは美しい光景で、今も目にやきついている。どんな真冬でも雪なぞ降らないところだから、外で遊べるしねー』と嘆息まじりに、毎年柿を食べながら同じことを繰り返し愚痴っていた。

故郷の家の人たちは、遠い北海道へ行ってしまった祖母に故郷の味を送り続け、いつの日にか、又もどってくるのを待ちわびていたのであろう。赤く燃えているストーブのそばで、柿を食べながら子供達はじっと、大人達の会話を聞かされた。『早く故郷の九州へ帰りたいねえー。寒くて雪の多い北海道は、もううんざりだねえー』

暖かい九州から屯田兵として未開の北海道に渡った祖父母達は、厳しい生活を強いられたのであろう。北海道の生活になかなか馴染めなく、その反面、望郷の念はつるばかり、いつも帰れる日を待ちわびていたようだ。そして話しが高ずると、明日にでも北海道を脱出して、故郷へ帰りそうな話になるのだが、実現したことがなかった。そのことを柿を口にしながら聞かされていた私は、札幌で生まれ、札幌が故郷なのに、どうしたらよいのであろうか、行く場所を失って捨て子にされたような気持ちになっていた。その思い出が、ちくりと胸をさすのである。

明治の初め祖父母達が、九州からはるばる北海道に新天地を求めて渡って来た時には、いつの日にか、この北海道で一旗揚げたら故郷へ錦をかざ

して帰ることを心に決めていたにちがいない。もしかしたら往復切符を買って九州を出、帰りの復路の切符をお守りにしていたのかもしれない。親達と一緒に北海道にきた幼い父も、いつも気持ちは故郷へ向いていたにちがいない。大きくなったら九州へ帰るのが親孝行と考えていたに違いない。後年になって知ったのであるが、祖父も父も屯田兵として取得した土地や、他人から譲り受けた広大な土地を、いとも簡単に投げ出している。不動産よりも身軽な形で財産形成をしていたようだ。故郷賛美を聞かされながらも子供達の心には、北海道が、ここが自分達の生まれたところ、故郷はここなんだ、ここしかないんだと心の中で反発していた。ここでしっかりと、地に脚をつけて生きてゆかなければと思うようになった。

社会人になって色々な人生を歩み、幾度か北海道を離れなければならない時ですらも、頑として北海道を離れなかった。と云うよりは、生活の場を札幌から変えることはなかった。自然の厳しさがあってもそれが織りなす四季の変化、気候風土と人間関係のすばらしさ、生活習慣の居心地の良さがあるので、私は北海道から動けない「北海道大好き人間」になってしまった。

明治時代に止むなく北海道へ移動してきた一世、二世の親達と違って、三世の時代になってはじめて北海道を愛し、北海道を故郷と考える人々の手によって、北海道の本当の開拓がはじまってきたのではないだろうか。

振り返ってみると、北海道の開拓は何時も国の政策に振り廻されていたきらいがあった。時にはエネルギーの供給基地として、時には食糧の基地として本州に貢献し、その為の開発だったと言ったら云いすぎであろうか。

北海道を愛し、北海道の人々の幸せの為の開発がはじまり、われわれがやるんだ、と云う自立の意識が、北海道のあちこちの地域で沸き起こっている。

やっとうちの時代が訪れるのであろう。

業務日誌

ほくとう DIARY

(平成6年11月～平成6年12月)

ほくとう総研のおもな出来事、活動内容についてご紹介します。

- 平成6年11月16～17日 地域おこし研究会開催（北海道天塩郡豊富町）
研究内容：事業化審査の事例、
民間企業の現場の体験、イベント仕掛人講座等
- 11月28日 地域おこし研究会開催（岩手県北上市）
研究内容：第3セクター事業の戦略
市街地再開発事業の進め方等
- 12月7日 地域おこし研究会開催（宮城県古川市）
研究内容：第3セクター事業の戦略
決算書の見方と起業化事例等
- 12月27日 NETT9号発行

事務局から

▲本誌へのご意見、ご要望、ご寄稿をお待ちしております▼

本誌に関するお問い合わせ、ご意見、ご要望がございましたら、下記までお気軽にお問い合わせ下さい。また、ご寄稿も歓迎いたします。内容は地域経済社会に関するテーマであれば、何でも結構です。詳細につきましてはお問い合わせ下さい（採用の場合、当財団の規定に基づき薄謝進呈）。

〒100 東京都千代田区大手町1-9-3 公庫ビル
ほくとう総研総務部 NETT編集部 宛
TEL 03-3242-1185(代) FAX 03-3242-1996

財団法人 北海道東北地域経済総合研究所機関誌

NETT

第9号(1994.12)

編集・発行人：布施 詮
発行：財団法人北海道東北地域経済総合研究所
東京都千代田区大手町1-9-3
(公庫ビル5F) ☎ 100
TEL 03-3242-1185
FAX 03-3242-1996

禁無断転載

▽十月四日北海道東方沖地震発生、釧路で震度6（烈震）を記録、九七センチの津波も観測。

▽世界的な大発見、縄文の都「三内丸山遺蹟」に湧く青森市（共に新聞記事等より）。

▽日本全土を揺るがし、平成六年の大ニュースに入ろうかと思われるこの二大事件が「ほくとう日本」で発生しました。

▽奇しくも、本年度の当財団及び北東公庫主催の地域シンポジウムが、釧路市（十月十三日）及び青森市（十月三十一日）の両市で開催されました。

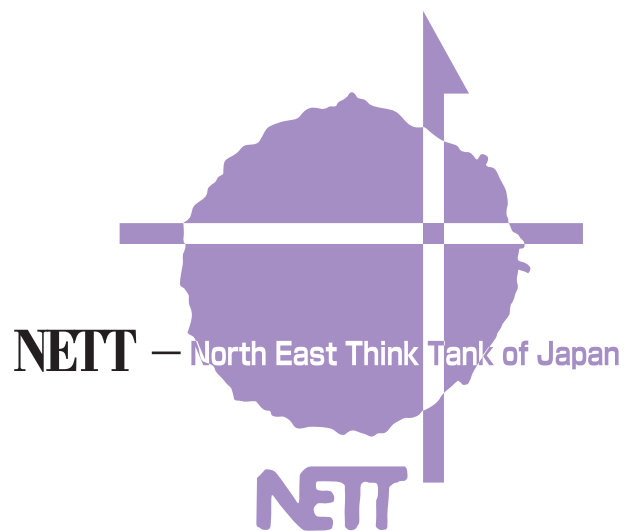
▽釧路では今野大阪産業大学教授が、「釧路は今、大きな歴史の流れの中で曲がり角にある」「今後生き延びるには、新しい時代に即応した、新しい基盤産業を自らの力で確立しなければいけない」と経済界の奮起を促しました。

▽また青森では糠谷国土庁計画・調整局長が、「これからの国土政策は、地域の多様性の尊重、多様な地域の中での連携・交流がポイントになる」「これからは、ほくとう日本の時代だ、青森は、その恵まれた歴史・文化・観光を生かした連携交流を軸に考えていく必要がある」と指摘されました。

▽今号より日本経済研究センターの武藤博道氏の「価格破壊の現場」を連載します。価格破壊の原因分析等によりその実態に迫ります。ご期待下さい。

▽窪田理事長の「新渡戸稲造」（本号・ほくとう日本のひとびと）には、いじめが社会問題化している時期だけに、人の親切・恩が心を揺さぶります。必読の人物評です。

（山口）



財団法人 北海道東北地域経済総合研究所
Hokkaido-Tohoku Regional Economic Research Institute (HRI)

〒100 東京都千代田区大手町1丁目9番3号 (公庫ビル)

TEL 03-3242-1185(代) FAX 03-3242-1996